

6 | 講義内容

科目名	単位数	講義内容
アカデミック・リテラシー Academic Literacy	2	人間の営みを分析していく研究方法として、人間の意識や行動を数値化して検討する量的研究がある。具体的には、研究仮説の立て方、仮説に対応したデータの収集の仕方、データの数値化とデータに対する統計処理の仕方、また研究目的や仮説の観点から統計処理の結果を解釈・考察する仕方、論文への記載の仕方、などを本科目で扱っていく。本科目を通して、論文を作成する際に必要な量的研究の基礎的知識を獲得し、各自が研究を効果的に遂行できるようにする。また、他者の研究についても批判的に検討することができるようにする。
英語教育研究方法論 Methodology for ELF Research	2	英語教育研究で多く使われている手法について、テーマの設定、資料の検索、データへのアプローチ、データの収集、データの分析の三段階を網羅的に紹介したうえで、特に英語教育をテーマとした質的分析を扱った論文を参考にしながら、リサーチデザイン、データの収集と整理、データの分析（量的分析と質的分析の目的の違い）、データの取り扱い上の留意点などを含む研究倫理、そして研究結果のまとめと発表について学び、最終的には学会等での発表要旨や発表資料を作成できるようにする。
ELF 500 ELF 500	2	ELF 500 This course is designed to develop students' academic literacy in English. Students are expected to acquire skills necessary for academic presentations as well as writing in their areas of specialty. It is primarily designed for 1st year graduate students of Humanities, although graduate students in other disciplines as well as qualified undergraduate students may enroll with permission.
英語教育研究 Studies in English Language Teaching	2	英語教育に関する研究を深めるために、多様な角度から英語教育の問題点や課題を洗い出し、それぞれの原因と解決策、および研究手法について概説し、今後の発展的な研究への橋渡しを行う。 英語教育は時代や社会の要請によって、そのあり方や力点が変わることもあるため、学習指導要領を論拠とするなどして、できる限り現代および今後の英語教育に直接寄与するという観点から授業を展開する。 扱う項目として、英語教育の歴史的考察、言語観・言語教育観、英語教育の目的論、教授法・指導法の種類と特徴、学習理論と動機付け、などがある。
現代英語研究 Studies in Contemporary English	2	現代英語の特徴と位置づけを明確にするために、英語を様々な観点から分析する。まず現代言語学の枠組みに基づき、規範的アプローチと記述的アプローチの違いを中心に、主な言語学の理論を理解した上で、英語の音韻、語彙、文法、意味、言語変種について概観する。 その際に、英語教育を行う上で重要と思われるいくつかの事例を取り上げて問題点と課題について議論する。研究に当たっては、共時的な観点だけではなく、通時的な観点をも適宜交えながら、現代英語への理解をより深いものとする。
言語獲得研究 Studies in Language Acquisition	2	言語の知識や運用能力はどのように身につけられるのか、その獲得・発達の過程とメカニズムを文献購読により研究し、特に英語の母語の獲得に関する理解を科学的な視点から深めることを目的とする。 取り上げるテーマは、音声言語獲得、語彙獲得、文法獲得など幅広い分野を扱う。言語獲得の過程における、母子相互作用や環境、学習との関わり、第二言語習得との違いなど、様々な視野で、乳幼児から小学生までを対象にデータを収集し研究を体験することで、実践的に研究する訓練を行う。
言語使用研究 Studies in Language Use	2	現代社会において、言語が実際に使用される様々な状況に焦点を当て、言語の使用目的と使用場面の事例を挙げながら、それぞれの言語使用がどのような特徴を持ち、社会にどのような影響を及ぼすかについて論ずる。 まず語用論、会話分析、スタイル、レジスター、ディスコースなどの基本的概念と研究手法を確認した後、教育、学術、法律、医療、マスメディアなど領域別の言語使用、さらにそれらの背景にある思想について事例研究を行う。その際に日本語との比較をとおして英語の持つ特殊性や独自性についても明らかにしていく。

科目名	単位数	講義内容
言語教育政策研究 Studies in Language Policy in Education	2	<p>世界のどの地域や国も言語問題を抱えており、国語、公用語、外国語などにおけるの政策立案と施行が大きな課題になっている。ここでは主として、英米における母語教育や外国語教育、カナダに代表されるイマージョン教育、アジアにおける外国語教育政策などを範にしつつ日本の言語教育について理解を深める。</p> <p>日本の言語教育政策、特に英語教育政策を史的に概観しながら現代の英語教育の課題や可能性を追究していく。言語教育(ことばの教育)は英語などの外国語だけの問題ではなく、日本語も含めて学校教育の重要な課題であることがこの授業の基盤になっている。</p>
英語授業演習 Seminar in Classroom Practice	2	<p>英語教授法や指導法の理論を踏まえて、中等学校において実際に効果的な授業が行えるようになるための演習を行う。</p> <p>特に、以下の五つの分野において実践(プレゼンテーション)を試みる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 語彙指導法 2. 音声指導法 3. 読みの指導法 4. コミュニケーションの指導法 5. 英語だけで教える指導法 <p>指導に当たっては、多様な授業案(lesson plan)の書き方、教材・教具の使い方、授業形態のあり方、などについても指導を行う。現場の授業を観察・体験したり、達人の授業と呼ばれるDVDを視聴したりすることも随時行いながら、授業力を向上させる。</p>
入門期英語教育研究 Studies in Teaching English to Beginners	2	<p>学校教育において英語教育が強化されるに伴い、入門期の英語教育が重要になっている。ここでは日本における教育環境と言語習得理論とを鑑みながら、効果的な指導のあり方を研究する。</p> <p>入門期においては多様な外国語活動が行われるが、言語習得の観点からみて特に重要なのが音声指導である。</p> <p>学習指導要領においても入門期において「音声などの素地」を育成することが重要であるということが謳われている。この授業では、入門期の指導法を総合的に押さえつつ、特に英語音声段階的に確実に獲得できるようになるための研究とトレーニングを行う。</p>
英語教材論研究 Studies in ELT Materials	2	<p>外国語の教材には「教科書」からメディア教材にいたるまでさまざまなものがある。しかし基本はテキストと呼ばれる教科書である。</p> <p>ここでは、文部科学省検定済み教科書を基本に据えて、その理念や内容、使い方等について、体験をしながら理解を深める。また、教科書の題材、言語材料、言語活動、シラバスなどについても掘り下げた研究を行い、教材分析の視点や手法を学ぶ。</p> <p>受講者は小・中・高のレベルを想定して、一単元分の教材作成、それをもとにした授業案の作成、模擬授業、事後評価、といった教材と授業を効果的に関連付ける技量も修得する。</p>
英語教育総合 Comprehensive Studies in ELT	2	<p>英語教員になるための資質、知識、技能を身につけるために英語教育を総合的な観点から研究する。取り上げる領域としては以下のようなものがある。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 公教育における教員の要件と資質 2. 英語教員に求められる知識と指導力 3. 英語力と英語コミュニケーション能力 4. 教員採用試験の実際 <p>受講者は上記のそれぞれの観点において、必要な知識・能力を身につけると同時に、体験やシミュレーションをとおして高度な実践力を身につける。</p>

科目名	単位数	講義内容
アメリカ文化研究 Studies in American Cultures	2	<p>アメリカは、「多くのものから成るひとつ」を国家のモットーとしてきた。「多くのもの」を尊重するか「ひとつ」に融合することに重きをおくか、相反する立場からの議論がぶつかり合ったり、どちらか一方に大きく傾いたりすることを繰り返しながら、アメリカは多民族・多文化社会の在り方を模索してきたといえる。</p> <p>この科目では、アメリカ文化形成の特質をあらわす文献の講読を通して、アメリカのアメリカらしさを把握することに努めると同時に、日本がアメリカの経験から何を学べるかを考える。また、辞書・事典類の使用に習熟しながら、アメリカ独特の言語表現の豊かさにも着目する。</p>
イギリス文化研究 Studies in British Cultures	2	<p>イギリスは、近現代の世界において、文化の面でも、言語の面でも大きな影響力を行使してきた。したがって、英語学や英語教育を研究する上でもイギリス文化に関する知識は必要不可欠である。</p> <p>ここでは様々な分野の文献や資料に当たりながら、英語の成り立ち、イギリスの歴史、文学、社会について理解を深める。特に英語およびイギリス文化がグレートブリテン島から、アメリカ、英連邦諸国、そして日本をはじめ世界にどのように広がっていったかということについて、これらの地域の言語文化との比較を交えながら、文学作品や映画などを通して探究していく。</p>
英語圏文学研究 Studies in Anglo-American Literature	2	<p>イギリス文学とアメリカ文学を中心に、丹念な講読によって英語による文学作品を読み解いていく。英米文学を読む際に欠かせない辞書および各種事典類の使用に習熟し、語注を作成し、的確な要約をできるように、演習を重ねる。特に、聖書やシェイクスピア作品などに由来する英語独特の慣用表現を見逃さず、英語圏の言語表現の伝統に十分に意識を向けるようにする。</p> <p>また、作品や作者についての文献を検索し、論者の主張を把握しそれを検討することによって、作品を分析する手法を会得していく。研究対象の作品を文学史の中に適切に位置づけられるよう、英米文学史の基礎的な知識を得ることも求められる。</p>
多文化社会研究 Studies in Critical Multiculturalism	2	<p>多文化社会で起こる言語が直接的あるいは間接的に関わる様々な問題を取り上げ、批判的アプローチにより分析し、それらの解決法を考える。扱う範囲は言語学を中心としながらも、必要に応じて教育学、社会学、社会心理学、倫理学、文化人類学、法学などにも言及する。</p> <p>ここでは、広義でいうディスコース、すなわちあるメッセージが発せられる時のその背景にある思想や価値観の研究を中心に、言語教育のあり方と社会との関係を論ずる。受講者にとっては当然と思われることを批判的に再検証する習慣を身につけることが要求される。</p>
英語科コースデザイン研究 Studies in ELF Course Design	2	<p>英語科の授業を実施するにあたっては教師の英語力や英語に関する知識、さらに授業力の向上が必要とされるが、今後は様々な制約の中で、教育環境に応じて柔軟に自分の授業をデザインする能力が必要不可欠である。</p> <p>本講座では教育環境、教育政策、教育目標を分析し、リソースを有効利用しながら受講者が英語の授業と到達度の評価方法を1学期、1学年といった中長期的視野でデザインをできるようになることを目標とする。</p>
プレサービス・スタディーズA Pre-service Studies A	1	<p>就業前に学外での現場体験を行い、必要な実践力を身につけることを目的とした科目である。プレサービス・スタディーズAは中等教育課程での教育実践の体験を対象とし、併設の玉川学園中学部、玉川学園高等部や近隣の中学校、高等学校、教育委員会と連携して、授業や教材作成の補助活動、そしてチーム・ティーチング等の実習を行う。</p> <p>実施に当たっては、計画書の提出、事前指導、事後指導および報告書の提出が義務付けられる。受講予定者は事前に所定の期間内に、計画書を提出し研究科会であらかじめ承認を得ておくことを必要とする。</p>
プレサービス・スタディーズB Pre-service Studies B	1	<p>就業前に学外での現場体験を行い、必要な実践力を身につけることを目的とした科目である。プレサービス・スタディーズBは近年ますます重要性を増している小・中の連携と関連した教育実践の体験を対象とし、併設の玉川学園小学部や近隣の小学校、教育委員会と連携して、授業や教材作成の補助活動、そしてチーム・ティーチング等の実習を行う。</p> <p>実施に当たっては、計画書の提出、事前指導、事後指導および報告書の提出が義務付けられる。受講予定者は事前に所定の期間内に、計画書を提出し研究科会であらかじめ承認を得ておくことを必要とする。</p>

科目名	単位数	講義内容
研究指導 I Master's Research Seminar I	2	<p>修士論文を執筆するための研究指導を行う。この科目はそれぞれの学生の研究指導担当教員が中心になって行われる。学生は、研究指導教員の指導のもとに研究テーマを確定して研究に着手する。</p> <p>研究に必要な文献や資料の収集、研究計画の立案、研究調査の実施、フィードバックなどを経て研究を進めていく。研究指導 I は演習科目であり、毎週決められた時間に指導を受けなければならない。また、この科目が修了する時点で、論文の骨格を完成させておく必要がある。</p>
研究指導 II Master's Research Seminar II	2	<p>研究指導 I に引き続いて修士論文を執筆するための指導を行う。研究指導 I と同様に、この科目はそれぞれの学生の研究指導担当教員が中心になって行われる。研究指導 II に着手するに当たっては修士論文の中間報告書を研究科に提出することが求められる。</p> <p>学生は、関連文献の更なる研究と共に、研究データの解析や整理を行いながら論文を完成させていく。修士論文は研究指導教員の指導を受けて完成し、指定された期日に研究科に提出する。</p>
研究者倫理 Research Ethics	2	<p>科学は多くの先人が作り上げてきた知識の体系であり、人類共有の資産である。科学研究とは、敬意を払ってこの知識の体系を利用しつつ、そこに新たな価値を加えることにより、その発展に寄与することである。科学の健全な発展は、研究活動が真実・信頼・公正に基づくことにより遂げられる。これらから逸脱して科学の健全な発展を阻害する行為が、研究における不正行為である。本講義では、研究における不正行為および疑わしき行為について、実際に遭遇し得る場面を想定しながら考え、議論することを通じて、実践知としての研究者倫理を身につける。</p>
統計 Statistics	2	<p>情報の送り手と受け手との間には埋められない情報格差（情報の非対称性）がある。この情報格差をいかに解消するかに情報を分析する意義がある。データは無味乾燥なもので、それ自体に意味はないが、それら情報を統計手法で分析することにより、情報の発信者の意思決定プロセスや情報の受け手の間に一定の傾向を見出すことができる。本講義では、統計ソフトRやエクセルを用いて多変量解析を行う。多変量解析は経済学、経営学、そして工学など幅広い分野で応用されており、これら分析を利用して意思決定が行われるケースが多々ある。本講義では、多変量解析（単回帰分析、重回帰分析、ロジスティック回帰分析）を理解し、実践できるようになるのが目的である。</p>
全人教育研究 Whole Man Education	2	<p>小原國芳の提唱した「全人教育論」の特徴を探る。小原はなぜ全人教育論を唱えたのか、それは如何なる人間観・教育観に由来するのか、如何なる価値体系に基づくのか、その理論は実践とどのように融合して来たのか、そして全人教育論は、西洋及び日本の教育にどのような影響を与えてきたのか、また、今日これからの教育にどのような意義を持つのか。小原國芳の「全人教育論」の理論と実践を総合的・全体的に理解するには、小原が玉川学園を創立するにあたって目標とした「12の教育信条」の体系的・構造的把握が欠かせないと考える。この12信条の一つひとつの有する意味とそれらの関係を考察することに重点を置くことを通して、K-16における「全人教育」の実現の在り方についても検討したい。</p>
Research Presentation Research Presentation	2	<p>学会や研究会における英語での口頭発表やポスター発表は自らの研究成果を示し、情報を交換する場として重要になってきている。本講義では事例となる論文について、その内容のポイントを読み取り、それを相手に的確に伝えるために何を表現するべきか、科学者・技術者の視点から指導する。受講者は自分の領域の代表的な論文を資料として、それを講師の指導をうけつつ理解し、自身で発表して後に改善の指導を受ける。指導は、スライドの作り方、ポイントの置き方、英語の表現、さらに他者の発表に対する質問のポイントの見つけ方など、発表者だけでなく聞いて議論する立場での方法も含まれる。</p>

科目名	単位数	講義内容
インターンシップ 500～599 Internship 500～599	2	<p>「インターンシップ 500～599」は、民間企業、各学校等（幼稚園・保育所を含む）・大学又は試験・研究機関（以下「派遣先機関等」という。）において、社会的にニーズのある先端的・実践的な研究課題に挑戦することを通して、“幅広い視点からの課題設定能力と問題解決能力”を養い、実践力・企画力・リーダーシップある人材を育成することを目的とする。実施にあたっては、派遣先機関等や扱う課題に応じて、集中又は分散して実施できる柔軟な体制をとる。受講者は、各研究科教務担当及び派遣先機関等の協働的な事前・事後指導の下で、諸活動に取り組みなければならない。本活動を通じて、自分自身の専門的能力と、各現場から要請される能力の差異を認識し、今後の研究活動に活用・応用していくことが期待される。受講にあたっては、研究科ごとに実施されるガイダンスに必ず出席すること。</p>
教育内容・方法学研究 Study of Curriculum and Instruction	2	<p>近年教育改革が大きく進み、学校の変革も目ざましい状況にある。ここでの重要な視点の一つとしてあげられるのが教育内容・方法の分野である。</p> <p>本講義においては、教育内容・方法学研究の意義と方法をもとに、学力編、教育課程理論と実際、教育方法学特に学習指導論の理論と実際について探究するものとする。このことを踏まえて、教師の力量形成との関連についても考察、吟味したい。</p>
教育制度学研究 Educational System	2	<p>今日の教育制度を理解するために重要な論点を中心に講義すると同時にワークショップによってさらに深い理解をめざすこととする。教育制度を根拠づける教育法律と制度の運用である教育行政との関係、つまり教育の【制度・法・行政】の総合的な把握が可能となれば、将来のリーダー的な教員として十分な専門知識を備えたこととなる。本講義がめざす姿である。</p> <p>内容として、初等中等教育制度とこの根拠となる学校教育法制の理解を深めつつ、具体的な事例として、幼稚園から高等学校における教育課程とこの担い手である教員の在り方に焦点をあて、政策・法・行政の関連をワークショップの課題とする。</p> <p>次に教育委員会制度を概観し、これまでの論点を検討した上で、現在大きな議論となっている同制度の改革課題について、これからの日本の教育の在り方・課題の実現の方法である教育振興基本計画・地方自治体の教育計画と関連づけた検討を通じて深めてみたい。</p>
教育実践学研究 Study of Education Practice	2	<p>近年における教育課題の複雑化・高度化に応じて、教師の実践的指導力とくに授業力が求められている。こうした実践力を育むためには、教育実践に関連した教職の基本的性格、教育実践の歴史、理論・方法を理解し、それらを基礎とした上で自らの実践のあり方を模索していく必要がある。</p> <p>この授業は、教育実践に伴う教師の日常世界、教育実践の歴史の変遷、理論的背景・方法論を理解・習得し、主体的に具体的な問題への解決策を探究することにより、多様な教育課題に対応できる能力の基礎を育むことを目指すものである。授業では講義をはじめ、参加者の研究報告、グループワーク、ディスカッション、現場教員によるワークショップなど、テーマに応じて多様な形式を取り入れるものとする。</p>